

人々の健康を願う年中行事
— うるま市勝連南風原のムーチーとシマクサラー —

阿利 よし乃

Annual rituals of Wishing for people's health
— Muchi and Shimaxaler in Katsurenhæbaru, Uruma City —

Yoshino ARI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第15号別刷

2022 年3月31 日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.15
March, 2022

人々の健康を願う年中行事 — うるま市勝連南風原のムーチーとシマクサラー —

阿利 よし乃¹⁾

Annual rituals of Wishing for people's health
— Muchi and Shimaxaler in Katsurenhaebaru, Uruma City —

Yoshino ARI¹⁾

はじめに

2020年2月12日、沖縄で初めての新型コロナウイルス感染症の感染者が確認された。それを皮切りに県内の感染者数は増加の一途を辿り、第2波や第3波など、何度も押し寄せてくる感染爆発の波にのまれ続けている。

その中で、政府は「生活様式の変容」を推奨し、人々の日常は大きく変化した。感染拡大を防ぐために大勢が集まってイベントを開催する、飲食を共にする場面への制限が設けられるようになった。それに関連して、新聞紙面やテレビニュースでは、年中行事の規模の縮小の様子などが数多く報じられた。

沖縄の年中行事の中には、フーチ（風気、伝染病、はやり風邪）を防ぎ、村人の健康を願うシマクサラーシや子どもの健やかな成長と家族の健康を祈願するムーチーなどがある。

それらの儀礼に関する参考文献として、宮平盛晃によるシマクサラーシの研究があげられる。宮平は琉球諸島の39市町村535村落のシマクサラーシを悉皆調査した。その成果を儀礼の名称や期日、目的などの項目ごとに類型化し、事例群を考察している[宮平2012, 2019]。宮平はシマクサラーシの性格を動物供犠と村落の境界性による除厄システムを中心とすると述べ、そのバリエーションを指摘している[宮平2012]。

宮平の考察によって、琉球諸島のシマクサラーシの諸相は明らかにされつつある。それでは、その考察を支える個々の事例の中で、人々は具体的にどのよ

うな祈願を行っているのだろうか。2021年1月19日、うるま市勝連南風原村落（以下、南風原と記述する）で調査を行った。この日は旧暦12月7日である。南風原では毎年旧暦12月7日に村落を単位としたシマクサラー、家を単位としたムーチーフユミの儀礼が行われている。コロナ禍という厳しい状況の中、南風原の方々にご協力いただき、それらの儀礼を観察する機会を得た。1日足らずの駆け足の調査であるが、コロナ禍における1村落の年中行事の様子を報告したい。

1. 調査地概況

南風原は方言でヘーバルという。沖縄本島中部の勝連半島の付け根に位置しており、勝連城の南斜面にあることが地名の由来であると伝えられている[「角川日本地名大辞典」編纂委員会1986:570]。2021年11月末の世帯数は1,612、人口は3,658人である^(注1)。村落の内部は8つの班に分けられている。



図1. 南風原の位置
(地理院地図を元に作成)

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

2. 家を単位として行われる儀礼

南風原ではシチニチムーチャーといって、旧暦12月7日に家レベルの儀礼が行われている。家族の健康を願ってムーチャーとよばれる餅を作って供える儀礼である。2021年1月19日（火）に南風原で暮らす60代のご夫婦のお宅で儀礼を見学する機会に恵まれた。

当日は火曜日で平日であった。話者は仕事に出る前に儀礼を行うため、17日日曜日のうちにムーチャーを作っていた。ムーチャーとは、餅粉をこねて方言でサンニンという月桃の葉で包んで蒸したものである。月桃の葉は、刈り取り後にあく抜きと消毒を兼ねて茹でて使う。葉を茹でると餅を包みやすいという利点もある。ムーチャーを茹でた茹で汁は当日の儀礼で使用するため、捨てずに保存されていた（写真1）。



写真1. ムーチャーと茹で汁

まず、ムーチャーの茹で汁を家の中や周囲に撒く儀礼が行われた。茹で汁を沸騰させ、それを月桃の葉で作ったサンを用いて、2階など家の中の遠い場所から入り口近くへと撒いていく。サンとは、沖縄の魔除けで用いられるものである。この儀礼では、月桃の葉を3枚重ねて1つ結びにして成形したものを使用していた（写真2）。

話者は、そのサンを使って鍋に入った熱々の茹で汁を「インヌヒサ ヤカヤカ、インヌヒサ ヤカヤカ」と唱えながら撒いていた（写真3）。この文句は、直訳すると「犬の足や鬼の足を焼くぞ、悪い者は家から出て行け」という意味である。インという語は犬を指す語であるが、この儀礼では鬼であるとも解されている。サンニンの葉には独特の香りがあるため、それを家の中から撒くことで、フーチや悪霊を追い払うことができるという。

ムーチャーの茹で汁をトイレや風呂など家の中に撒いたあとは、家の外に出る。それから、家の周囲を囲うように「インヌヒサ ヤカヤカ」と唱えながら茹で汁を撒いていく。そして最後に、屋敷の出入口である門に線を引くように茹で汁の全てを注ぎこぼす。これは、家の中から追い出したフーチが屋敷の中に入らないように結界を張るために行われた。



写真2. 熱した茹で汁とサン



写真3. 家の周囲に茹で汁を撒く

それから、インヌヒサを家の出入口に吊す儀礼が行われた。インヌヒサとは、ムーチャーを包んでいたサンニンの葉を十字に重ねて紐で結んだものである。昔はムーチャーを食べたあとの葉と紐を利用してインヌヒサを作っていた。しかし現在は衛生面を考慮して、食べたあとの葉を利用するのではなく、インヌヒサ専用の葉を蒸して使う家庭が多いという。インヌヒサは家の四隅や玄関、勝手口など、家の出入りに使う場所に吊された（写真4、5）。

インヌヒサの儀礼の後には仏壇で祈願が行われた。この日は、火の神に手を合わせた後に仏壇に温めたムーチャーを供える。この供え物のことをヌシムーチャーという。ヌシムーチャーとは、家の主のヌシを意味している。方言でヤグナという家族の人数

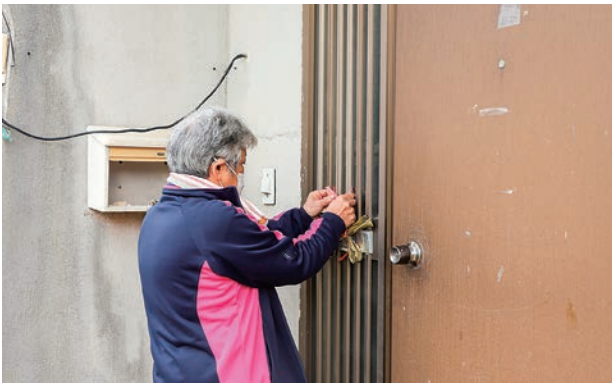


写真 4. 玄関にインヌヒサを吊す

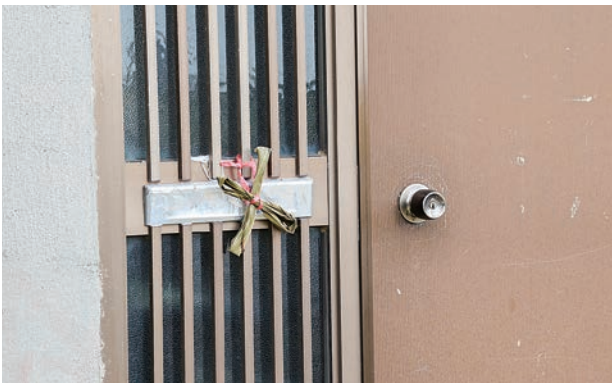


写真 5. インヌヒサ



写真 6. ヌシムーチャー

分のムーチャーを1枚の皿に供える（写真6）。ヌシムーチャーは、アハモチという砂糖を入れない餅粉だけで作ったものを供える。また、ヌシムーチャーの他に、豚と大根を煮込んだおつゆとご飯を供えて祈願を行う（写真7）。話者は県外で暮らしている長男や次男も含めて7つのムーチャーを1つの皿にまとめてヌシムーチャーとして供えていた。

ムーチャーは仏壇に供えるだけではなく、数多く作って親戚にも配る。とくに、子どもが生まれて初めて迎えるムーチャーはハチムーチャーといって、祖母宅にムーチャーを供えて祈願し、親戚に配るという。



写真 7. 仏壇の供え物

3. 村落を単位として行われる儀礼

19日の12時50分から公民館の役員たちはシマクサラーの準備に取りかかった。この行事は、左撚りになった縄をムラの入口に張り、フーチゲーシ（伝染病を払う）をするものである。

シマクサラーは区長と評議員議長、書記の3名で執り行われた。まず、酒と三枚肉などを持って軽トラックに乗り込み、ムラの東側の倉庫で保管している竹竿と左縄を取りに向かう。左縄は数年間同じ物を使用し続けているとのことである。それらを軽トラックの荷台に積み込み、まず南風原小学校の東側に向かう（写真8）。竹竿に左縄をくくりつけ、その縄の中央に豚の三枚肉を挟み込む（写真9、10）。そして、その縄をもう一本の竹竿に結び、その竹竿を通りの端に立てる（写真11）。この作業を3名が手分けをしながら進めていた。竹竿を立て終えて縄を張ると、区長が泡盛を竹竿の根元に注いだ。これは、肉と酒を供えるのでムラの中にフーチが入ってきませんようにという意味を込めて行っているという。

左縄を張る場所を示したのが図2である。黒い丸印は縄を張った場所を指している。その印の側の数字は縄を張った順番である。この図をみると、ムラを囲うように縄を張り、フーチを払っていることがわかる。

左縄を張り、酒を供える儀礼は15時半頃までに10ヵ所で行われた。儀礼の途中に通りで話を伺ったお年寄りによると、昔はシシモチといって、肉と餅を縄に挟んでいたとのことだった。



図 2. 左縄を張る場所と順番



写真 8. 竹竿と左縄を軽トラックに積み込む



写真 10. 左縄に豚の三枚肉を挟み込む



写真 9. 竹竿に左縄をくくりつける



写真 11. 三枚肉を挟んだ縄をムラの入り口に張る

おわりに

本稿では2021年の旧暦12月7日の南風原村落の様子について、簡単な調査報告を行った。南風原ではこの日、ムーチーとシマクサラーの2種の行事が行われていた。そのどちらも、冬の寒い時期に人々の健康を脅かすフーチ（伝染病）を払うことを目的としていた。各家庭ではムーチーを作り、その茹で汁で悪霊を追い払い、インヌヒサを吊すことでフーチが入ってくるのを防ぐ。その一方で、村落レベルではシマクサラーを行うことでムラにフーチが入ってくるのを防いでいた。家やムラを単位として、さまざまなレベルで南風原の人々が健康を願う様子を知ることができた。

調査の最後に南風原学童クラブにお邪魔すると、先生方が子どもたちの健やかな成長を願ってたくさんムーチーを作っていた（写真12）。例年は子どもたちと一緒にムーチー作りを行っているが、今年はコロナ感染対策のために先生方のみでムーチーを作っているとのことである。子どもたちの健康と成長を切に願う人々の姿を記録することができた。



写真 12. 南風原学童クラブの先生たち

注1) 南風原公民館新聞第29号掲載の数値である。

【参考文献】

角川日本地名大辞典 編纂委員会 1986『角川地名大辞典 47 沖縄県』角川書店
宮平盛晃 2012「南島におけるシマクサラシの性格」『捧げられる生命 沖縄の動物供犠』お茶の水書房
宮平盛晃 2019『琉球諸島の動物儀礼 — シマクサラシ儀礼の民俗学的研究』勉誠出版

